
高校生探偵 鋼

椿 智和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生探偵 鋼

【Nコード】

N9377U

【作者名】

椿 智和

【あらすじ】

この時代は殺人、密輸、密売、盗難など数多の事件が存在する。

そこで日本は多くの犯罪をなくすため、刑事や探偵を育成する高校、探偵科高校を設立した。

そして、2050年4月、探偵科高校に入学する1人の少年がいた。この物語は名探偵 鋼光聖と仲間たちが織り成す、さまざまな事件を解決していく物語である。

登場人物集

はがねこうせい
鋼光聖

性別 男

鋼家の長男。2歳年上の姉がいる。

髪の色は黒で、少し長め。

体術がとても長けており、拳銃の設計や武器の改造が得意である。

サッカーの技術がプロ級で、中学の頃、弱小と呼ばれていたサッカー

部を全国準優勝まで導いた。

中学の頃、いろいろな事件を解決したり、犯罪組織を潰したこともあり、一部の探偵には有名である。

パソコンのタイピングも速く、音楽は主にバイオリンが得意である。

ある事件をきっかけに秘密警察官として、警視庁特別犯罪捜査課に所属している。階級は警視。

あおぞらこころ
青空琴梨

性別 女

青空財閥の一人娘。光聖のクラスメイトである。

ドジで、やや天然ではあるが、とても頭がいい。

いつもおっとりしていて、面倒見のいい性格をしている。

舞踊していたことから、身体能力は悪くないが、体力があまりない。

かめいしずか
亀井静香

性別 女

光聖の幼馴染。身体能力と頭がよく、スタイルがいい。

性格は無口ではあるが、とても頼れる人物である。

父親は警視庁捜査二課の警部。

はっとりけんぞう
服部謙造

性別 男

髪は短髪で色は黒。

武術は剣道をやっており、その腕は相当なものである。頭脳は光聖と同等。

関東ではあまり有名ではないが、関西では探偵として少し有名である。

光聖とは、光聖が修学旅行のときに出会い、その後仲良くなった。

おおはらあかね
大原茜

性別 女

琴梨の中学の頃からの友達。

男に負けないほど勝ち気で明るい性格をしている。

身体は小柄だが、身体能力は高く、足が速い。

推理力も中々いい。得意分野は剣道で、腕は服部程ではないが、強い。

ふかみきようすけ
深海京介

性別 男

性格がとても勝気。だが優しい一面もある。

武術は空手や柔道などをやっている。戦闘の仕方はほとんど力任せ。頭は結構バカで人の話もろくに聞かないが、身体能力は高く、身体がとても丈夫である。

さくらだあおい
桜田葵

性別 女

髪の毛は色が紺色で、髪形はポニーテール。

剣道の名門の一家で桜田家の長女。剣道の腕は随一で、服部を凌駕するほどである。推理力も中々のもので、容姿はとても美しく、かわい。

身体は華奢だが、俊敏な動きが得意である。

実は可愛いぬいぐるみを集めるのが、趣味で、このことは家族以外には秘密にしている。

いちじょうれん

一条蓮

性別 男

髪の毛は茶髪で、容姿はすごくカッコいいイケメンである。武術は剣道や体術などいろいろなことをやっており、そして、そのすべてが強い。射撃も正確であり、推理力もずば抜けている。

光聖とは、中学の頃、事件のときに知り合った。仲はあまり良くないがライバルとして光聖の実力を認めている。

せきかわしょう

関川翔

性別 男

いつも無口で、どんな時でも冷静沈着な性格をしている。

得意分野は、射撃で主に二丁拳銃を使っている。だがあまり近距離での闘いは得意ではない。

推理力はけっこうよく、一条が認めるほどである。

容姿は一条に負けないほどのイケメンで女子に人気がある。

第1話 始まり (前書き)

この世界は並行世界であり、
この話はフィクションです。

第1話 始まり

現代は犯罪や殺人など、多くの事件が存在する。

そこで日本は、犯罪を減らすために、刑事や探偵を育成する高校、探偵科高校設立した。

東京探偵科付属第一高校

千葉探偵科付属第二高校

埼玉探偵科付属第三高校

の3つの探偵科高校がある。

そして、2050年4月、東京探偵科付属第一高校に入学する1人の少年がいた。

「ここが探偵科高校か」

彼の名は鋼光聖（はがねこうせい）。少し名の知れた探偵だ。彼は今、第一高校（東京探偵科付属第一高校）の中庭にいる。

「さて、もうすぐ入学式か。そろそろいかないとな。んっ？」

彼の前に1人の小柄な少女がいた。

「あの、すいません、入学式の会場って、どこですか？」

と少し恥ずかしそうに聞いてきた。

「入学式の会場がわからないのなら、俺も新生なので、一緒に行きましょう」

「すいません、迷惑をかけて。」

「いえいえ、同じ新生なので、迷惑じゃありませんよ。そういえば、名前を言ってなかったね。俺の名前は鋼光聖。君の名前は？」

「私は青空琴梨（あおぞらことり）といいます。あの、そっ、その、よろしく願います」

「新生同士だから、そんなにかたくななくてもいいよ。俺は君のことを琴梨って呼ぶから、俺のことは光聖でいいよ」

「…はい…」

（それにしても、青空ということはあの青空財閥の娘か）

そして、二人は入学式の会場である、第一ホールに向かっていった。

「ふう、やつとついたな」

「そうですね、……………キャッ」

琴梨、何も無いところでこける。

「痛たたたたっ」

「大丈夫か？」

琴梨は微笑みながら、

「だっ、大丈夫です。あっ、……………いったっ」

琴梨はまたこけた。

（けっこうドジなんだな）

第一ホールの電気が消えた。

他の人たちが、

「なんだ？なんだ！？」

と騒ぎはじめた。しばらくすると1つのところにスポットライトが出てきて、その中にいる人が、

「シャーラップー！」

すると、今まで騒いでいた人たちが黙り始めた。

「失礼、では、新入生のみなさん入学おめでとう。私は入学式の司会をします。本間勤（ほんまつとむ）と申します。

それでは、みなさん入学式を始めたいところですが、実はまだクラス分けが出来てないので。ハハハハッ！！」

他の人たちが、

「おいおい何やってんだよ」

と言った。

その時、光聖は、

（クラス分けをやっていないということは……………）

「そう！もうお気づきの人もいらつしやいますが、この探偵科高校は入試をしました……が、それは、普通科のものしか、してません。そこで、今からA、B、C、Dのクラス分けもかねて、推理力テストをしたいと思います」

光聖は、（……やはりそうか）

「ルールは簡単。あそこに扉があるのでしよう。そこから、迷路になっています。その迷路の途中には、いろいろな問題があります。暗号や殺人に関した問題を解いていき、ゴールを目指します。……おっと、いい忘れてました。問題を間違えた場合、落とし穴などに落とされたりし、迷路が難解になっていきます。そして、最後のゴールにある、A、B、C、Dの旗を取り、クラス分けは終了です。テストは1人でもいいし、複数でやってもいいです。ただし、複数の場合は6人までとします。」

今から、30分後、推理力テストを開始します。それまでの間仲間を集めるなり、1人でやるか、複数でやるかを考えたりしてください。それでは、みなさん30分後、また会いましょう」

スポットライトが消え、第一ホールの明かりがついた。

「ふっ」

「こっ、光聖君？」

光聖はニヤツとし、

「おもしろそうだな。あんまり学校で推理したくねーけど、おもしろそうだから……やるか！ 琴梨！俺と組むか？」

琴梨は少し戸惑いながら、

「えっ！？あっ、うっうん」

推理力テストまで、あと30分。そして、この日から、光聖の波乱の日々が始まった。

第1話 始まり (後書き)

どうも、椿智和です。

投稿するスピードが遅いですが、
よろしく願います。

第2話 いろいろな仲間との出会い（前書き）

この世界は並行世界であり、
フィクションです。ちなみに年は2050年です。

第2話 いろいろな仲間との出会い

推理力テストまで、あと30分その間、仲間を集めるべきなのだが、光聖は……………」

「さて、琴梨と組んだし、テストが始まるまで、寝るとするか」
そこに琴梨が

「いやいやいやいや、もっと仲間を集めないといけないんだから、寝ちゃだめだよ」

「え……………、めんどくせー」

と光聖は嫌そうな顔で言う。

「でも、仲間がいつぱい、いた方が有利だと思うよ」
と琴梨は言った。

それで、光聖はしかたなく、

「……………わかった」

と言った。

「それで？ どうやって集めるんだ？ 役に立たない奴はいやだぜ、俺は」

「う……………ん……………」

と琴梨が悩んでいたら、

「光聖君？」

と一人の少女に話しかけられた。

「はい？」

「あの、あなたは鋼光聖さんですか？」

「はい。俺が鋼光聖ですけど……………」

すると、その少女は笑顔で、

「やつぱり！ 光聖君だ！ 私だよ。わ・た・し！ 亀井静香だよ！」

光聖は驚いた顔で、

「亀井！？ いや、久しぶりだな。おまえもこの高校に入学していたとはな」

「ま〜ね〜。」

すると琴梨が

「あの〜、お二人はいつたいどういうご関係で？」

光聖が答えた。

「ああ、幼馴染だよ。そうだ、亀井、紹介するよ。彼女はさっき知り合った、青空琴梨だ」

「青空琴梨です。よろしくお願いします」

「私は亀井静香。よろしくね、琴梨ちゃん」

そして、静香は光聖と琴梨を見て、

「それにしても光聖君、こんなにかわいい娘と組むとは、意外にやりますな！」

「おいおい、人聞きの悪いことを言うな。琴梨が入学式の会場の場所がわからなかったから、一緒に行っただけだ」

静香は疑うような目で、

「ふ〜ん、琴梨ちゃん本当？」

「うっ、うん。本当だよ！？」

と琴梨はおどしながら言った。

「琴梨ちゃんが言うのなら、本当かな？」

だが、静香はまだ怪しそうな目で見ていた。

そこで光聖は話題を変えようと、

「そっぴや亀井、お前ってまだ仲間を集めてないよな？」

「うん、そっぴだよ」

「じゃあよ、俺たちと組もうぜ！」

すると静香はわざと嫌そうな顔で、

「えー、あんたと組むのー？」

「どうせ、組む奴いねーだろ？ なら俺たちと組んでもいいだろ？」

そして、静香は観念したようで、

「うっ、わかったよ！ わ・か・っ・た！ 組めばいいんでしょ、

組めば！」

光聖は嬉しそうな顔で、

「サンキュー、亀井！」

静香が、

「それで？ どうすんの？ 別にもっと仲間を集めなくてもいけると思うけど……」

琴梨は、

「私はもつと集めた方がいいと思うよ。………光聖君はどう思う？」
「……………」

と光聖は考えているのではなく、眠ろうとしている途中で、

「光聖やと？」

と1人の少年が言った。

その少年は段々光聖に近づいていき、

「お前鋼光聖やか？」

と聞いてきたから、光聖は……、

「ああ、そうだけど」

と返事をした。するとその少年は、

「やっぱ光聖やか！ 久しぶりやな」

だが光聖は、首をかしげながら……、

「お前誰だ？ どつかで会ったことあったか？」

「なんや、ワイのこと忘れたんか？ まあ、1年ぶりやから……、

そりやそうやな。ワイは服部謙造^{はっとりけんそう}や！ ほら、去年の四月に大阪で

会ったやろ？」

と服部が言ったら、光聖は思い出してきたのか、

「ああ！ 修学旅行のときの！」

「そら、思い出したやろ」

光聖は、

「いや、まさかお前がここに入学しているとはな。けど、嬉しいぜ！」

と言いながら、光聖と服部は握手をした。

「で、そのお二人さんは……………」

「ああ、こっちはさっき知り合った、青空琴梨。そして、幼馴染の

亀井静香だ」

「ワイは服部謙造や。よろしゅうな」

最初に琴梨が

「青空琴梨です。よろしくお願いします」

次に静香が、

「私は亀井静香。よろしくね、服部君」

「なあ、服部。推理力テスト、一緒にやらねーか？お前といえば、俺は心強い。」

服部は嬉しそうな顔で

「何いっとんねん、ワイとお前が組むのは、当たり前や」

「じゃ、決まりだな」

そして、光聖たちはそのまま、ここにいるのもなんなので、ぶらぶらと移動することにした。

推理力テストまで、あと20分の間、光聖、琴梨、静香、服部の4

人は仲間を集めるためにぶらぶらと歩いていて。すると、琴梨が

「ねえ、服部君って大阪から来たの？」

「そやけど、それがどうかしたんか？」

「いや、どうして来たのかなーって思ってた……」

「んー、まー刑事になるためでもあるが、大阪に探偵科高校がないし、一番の理由は光聖に会うためやな」

琴梨は驚き、

「えっ、大阪に探偵科高校ってないの!？」

すると、静香と服部は目を丸くし、光聖は呆れたような目であつた。

「アホか、琴梨。探偵科高校は東京にある、東京探偵科付属第一高校、千葉県にある、千葉探偵科付属第二高校、埼玉県にある、埼玉探偵科付属第三高校の3つだけなんだよ」

「へえ、そうなんだ」

光聖は（こいつ大丈夫か？）と思っていた。

光聖たちがそんな話をしていたら、第一ホールが騒がしくなっていた。

「なんや、なんや？ 騒がしいな。」

光聖たちは前に出て、何が起こっているか、見に行った。そしたら、1人の少年と1人の少女がなにやら言い争っていた。

「何なんだよ！ おめえは！」

「そっちこそ何なのよ！ 最初に因縁をつけてきたのはそっちですよ！！」

という感じで言い争っていた。

そこに琴梨がその少女に話をかけた。

「……茜ちゃん？」

「んっ？ あっ、琴梨！ 琴梨じゃない！ 久しぶり！！」

「うっ、うん……。久しぶり。それにしても、どうしたの？ こんなに騒いで」

「それが聞いてよ、琴梨！ こいつ人の肩をぶつけてきたと思ったら、いきなり文句をつけてきたのよ！ ひどいでしょ？」

するとこいつ呼ばわりされた少年は、

「おい、なに都合のいいように解釈してんだ。もとわといえば、お前が原因だろうが」

と言った。

「え、そうだったけ？」

「とばけんな！ 肩がぶつかった後、お前は俺に向かって、『自分からぶつかってきたくせに謝らないなんて、何なのよ！ 失礼な奴！ 失礼な奴！！』って、言ってたじゃねえか！」

「うっ、それはそうかもしれないけど、それであんたが絡んできたのが悪いでしょうが！！」

そして、また二人がガミガミ口喧嘩している中、光聖が

「ふあ、なあ、あんたら二人とも見たところ誰とも組んでないみ

ただいけど……、よかつたら俺たちと組まないか？」

と言った。そしたら少女のほうは

「いいよ！」

と元気よく返事をした。すると少年のほうはこれを見て、負けたくないと思つたのか…、

「俺もいいぜ！！」

と言った。

少女は嫌そうな顔で

「えゝ、あんたも組むのゝ」

「別にいいだろーが！ そんなん俺の自由だろ。」

とまたまた口喧嘩しそうだったから、光聖が咳払いをし、

「自己紹介しようか」

と言った。最初に少女の方が先に答えた。

「私の名は大原茜。おおはらあかね ええと、琴梨とは中学で知り合つた友達で、得

意なのは、剣道です！」

次に少年が答えた。

「俺は深海京介。主に武術は、空手と柔道をやっていた。将来は警察の機動隊や陸軍などの身体を動かす系に就きたいと思っている。

まあ、よろしくな！」

そして、光聖、琴梨、静香、服部はそれぞれ自己紹介をした。

推理力テストまで、あと5分。

第2話 いろいろな仲間との出会い（後書き）

疲れた……………。

あゝ、トリックが浮かばないよ。

何かアドバイスがあったら、ください！お願いします！！

第3話 推理力テスト『前編』

推理力テストが始まるまで後5分。

「それにしてもよう、推理力テストってどんな問題が出るんだ？」
と深海が言ったら

「バツカじゃないの！？ あんた、人の話を聞いてたの？ 暗号クイズや殺人事件に関する問題が出るのよ！！ これだからバカは嫌になるわ」

と茜は言った。すると深海はきれて、

「んだと！？ コラッ！！ てめえぶっ飛ばしてやろうか！」

「あゝら、やる気？ やってやろうじゃないの！！」

「二人とも落ち着いて！ 仲間なんだから、もっと仲良くしようよ」
琴梨は二人をなだめたが、喧嘩をやめようとしなかった。だが、しばらくすると深海と茜は

「…………ツチ」

「…………フンツ」とお互いそっぽを向いた。なぜいきなり二人が喧嘩をやめたかというところ……、亀井静香がものすごい威圧感を出していたからである。

ちなみに光聖と服部は推理力テストをどうやろうか話し合っていた。そうしていたら、推理力テスト開始時間がきた。

照明が消え、しばらくたったら1つのところにスポットライトが出てきて、その中には人が1人いた。

「ハロー エブリワン！！ 今日の司会者、本間勤ほんまつつとむです。皆さん仲間が集まりましたか？ それでは、推理力テストを始める前にもう一度ルールの説明をしましょう。まずあそこに扉があります。あそこの中に入り、そこの中にはいくつかのボックスがあります。

そして、ボックスの中に入り、オープニングクイズをしてもらいます。その問題を正解した場合、迷路に入る扉に進めます。逆に不正解だった場合、落とし穴に落ちてもらい、そこから迷路に進んでもらいます。ちなみにオープニングクイズが不正解だったものは約5分間口スがあります。そして、暗号クイズや推理クイズをしながら進みます。ですが、一つ一つの問題には制限時間があります。わかっていると思いますが問題が正解しない限り、一生ゴールにはたどりつけません。最後のゴールには、A、B、C、Dの旗のいずれかを取って、終了です。それではテストを始めます。まず、あそこの扉に入ってください」

光聖たちは扉のほうに向かっていた。のだが、琴梨の身体が震えていた。

それを光聖が心配して

「大丈夫か？ 琴梨。少し顔色悪いぞ」

「はい。大丈夫です」

すると茜が微笑みながら

「大丈夫！ 大丈夫！ 琴梨はただ緊張しているだけだから。琴梨は結構緊張しやすい娘なの」

「なら、緊張をほぐさせたりしろよ」

「わかりやした！！ 琴梨、えーと、手の平に入っている字を3回書いて、それを飲み込むの」

「う……うん、わかった。えーと、手の平に入っている字を3回書いて、それを飲み込……」 「ダメダメダメ！ 手を飲み込んでみ込むのよ」

「……………うん、わかった」

光聖はこれを見て、

（……………少し天然なんだな）と思っていた。

そんなことをしながら、扉の中に入っていた。

オープニングクイズをする部屋の中には5、6人程度入るくらいのボックスが、いくつか並んでいた。そして、司会者がしゃべりだした。

「では、クイズを始めますので、みなさんはそこにある、ボックスに入ってください」

俺たちはボックスの中に入っていた。しかし、琴梨がまだ緊張しているようだ。とは、いっても、顔には出していないが、俺も（光聖も）緊張しているのだ。だが、同時にこの推理力テストをするのにワクワクしている。そんなことを思いながら、ボックスの中に入った。

そして、司会者、本間勤のオープニングクイズが始まった。

「それでは、推理力テストを始めたいと思います。まず、最初は私、本間勤のオープニングクイズを解いてから、迷路に入ってもらいます。それでは、推理力テスト、スタート――」

画面のディスプレイにオープニングクイズの問題がでた。

オープニングクイズ

とあるホテルで事件が起きました。

新潟大学の松井教授が殺されていたのです。

財布や時計、ノートパソコンなどの貴重品がそのままであったため、物取りの犯行でないことはすぐに解りました。

そして司法解剖の結果、睡眠薬が検出されたのと、首にうつ血した跡があり、さらに抵抗した様子もないことから、眠らされた上で絞殺された、ということ解りました。

捜査の結果、アリバイと怨恨の有無から容疑者が二人にしばらくま
した。

1人は加藤道孝という助教授で、自分の論文を松井教授に奪われ、
発表されたことに恨みを持っていました。

もう1人は坂下智樹という、松井教授が勤める大学の学生で、
就職が内定していたにもかかわらず松井教授に単位をもらえず、留
年が決定して内定を取り消されたことに恨みを持っていました。

無論どちらも犯行を否認しています。

そんな中、大学の松井教授のパソコンに、一通のメールが届いてい
るのが発見されました。

送信元は松井教授自身のノートパソコンで、送信日時は殺された時
刻とほぼ一致しました。

内容は『21+45+13+72+42+41+21』

どうやら暗号のようです。

さて、犯人は加藤道孝と坂下智樹のどちらでしょうか？

この問題の制限時間は5分。

なぜこの犯人なのかその理由も答えてもらいます。

光聖、琴梨、静香、服部、深海、茜の六人はこのオープニングクイ
ズを考えていた。

既に光聖と服部は答えがわかったようである。

そして、同時に

光聖「わかったぞ。この問題簡単だな」

服部「わかったで！ こんな問題簡単や！！」

と言った。すると、二人はお互いを見て、先に光聖が

「さすがだな、もうわかったのか」

次に服部が

「そういうと、お前もさすがだな」

琴梨、静香、深海、茜の4人はまだ解っていないようである。

それもそのはず、光聖と服部の2人は問題を読んだから1分もたたない内に解ったのだから、解ったのが早すぎると言ってもいいだろう。琴梨は2人が解ったのを見て驚いた様子で

「2人とももう解ったの!？」

と聞いた。深海と茜も正直驚いているのである。だが静香は驚いていない様子だった。恐らくこの2人はすぐに解ると思っていたか、問題に集中していて何も聞こえていないのだろう。

「ああ、わかったぜ」

「ワイもわかったで」

と2人とも笑顔で答えた。しばらく黙りこくっていた静香がいきなり「私も解ったわ!!」と叫んだ。

「静香ちゃんも解ったの!？」

と琴梨が言った。

茜が少し驚いた様子で

「ふえ〜〜、静香ちゃんも解ったの? すごー!!」

深海は怪訝な顔で

「そう言っている、お前はまだわかんねえだろ」

「それはあんたもでしょ?」

「まあ、そうだな……」茜はさつさとオープニングクイズを終わらせたいので

「じゃあ、さつさとこの問題を答えて、迷路に入りましょ」

そう言われると光聖は頷き

「ああ、わかった」

そして、光聖、静香、服部の3人はオープニングクイズの解答を始

めた。

光聖「まず、松井教授のノートパソコンから出てきた、ダイニング
メッセージ『21+45+13+72+42+41+21』だがあ
れは……………」

服部「あれはやな、五十音の何行、何段を示しているんや！」

静香「たとえば、最初の21なら2行目（か行）の1段目だから
か。次の45は4行目（た行）の5段目だからと。って、いうよ
うな感じになるの。こんな感じに当てはめていくと『かとうみちた
か』ってなるから、犯人は加藤道孝！！ と言いたいところなんだ
けど……………」

服部「問題文に『抵抗した様子がない』って、出てるやろ？被害者
松井教授は眠らされて、絞殺されたんや。つまりや！ 抵抗でき
ずに殺された人間が、パソコンのメールで、しかも暗号を考えて送
ることなんてできるわけない。そう考えると……………」

光聖「そう考えると犯人が加藤に罪をなすりつけようとしたと考え
られる……………」だから、犯人はもう1人の方の坂下智樹さんだ」

そついうと画面のモニターに「正解！」という文字が出てきた。画
面のモニターがドアに変わった。

おそらく迷路への扉だろう……………」

「じゃあ、行くか。迷路に入ろうぜ」

光聖はそういつて迷路に入ってしまった。他のメンバーも光聖に続い
て迷路に入ってしまった。

第3話 推理力テスト『前編』（後書き）

次回は推理力テストの続きです。

一応、次で推理力テストは終わらせるつもりです。

第4話 推理力テスト『後編』

光聖、琴梨、静香、服部、深海、茜の6人はオープニングクイズを解き、推理力テストをしていた。光聖たちは今、推理迷路の最初の問題に向かって、進んでいるところだ。

「なあ、本当にこの道であつてるのか？」

「あつてるに決まってるでしょ！ 道は1つしかないんだから、バカじゃないの!？」

「んだとっ!？ コラッ!!」

「まあまあ、2人とも落ち着いて」

「うるさいわよ! 2人とも」

深海、茜、深海、琴梨、静香の順に話していた。

静香は迷路進んでいて、何か違和感を感じたのか。光聖にこんなことを聞いてみた。

「ねえ、光聖君、この迷路変じゃない？ なんとというか、この迷路、本当に迷路なの？ 私、推理力テストで迷路をやるって聞いたとき、複雑な迷路をやると思ったけど、この迷路道が1つしかないじゃない」

「たしかにそうだな。この迷路道が1つしかないな」

「でしょ？ こんなんだったら、迷路なんかやらないで普通に推理力テストをすればいいのに……」

「…………… たぶん、問題を解くスピードを知りたいからじゃないかな」

静香は頭にハテナマーク浮かべ

「なんで？」と聞いた。

「なんでって、俺が思うに一応このテストを受けている人はこの高

校の受験、合格しているだろ？ 元々、この高校のレベルは高いから、みんな、それなりに推理力は持っていると思うんだよね」

「だから、迷路を使ってテストをしているのね」

光聖と静香たちはこの推理力テストについての話をしていたら、最初の問題の地点に到達した。

問題1

ホイクイサニシヘロ
ラクイロテモセリセ
モチアオカスカワセ
キマキモヒアウユリ
ホレスレロトテカリ

Q・間に挟まっている日はいつでしょう？

制限時間は2分間

真っ先に光聖、服部、静香、琴梨の4人がわかった。そして、この問題にあまり時間をかけていられないのでさっさと答えることにした。

答えたのは静香だ。

「答えはクリスマス」

その後にピンポン、正解！という音になり、道が開いた。

「よし、行こう」と光聖が行き、他の面々も後に続いた。

どんどん迷路を進んでいったら、迷路の道が右と左の2つに分かれていた。

「なんだよ！ 道が二手に分かれてんじゃないか」

と深海はイラついた声で言った。
「ねえ、真ん中に何か書いてあるよ」
茜はそう言い、道の右側と左側の真ん中にある石版に近づいていった。光聖たちもその後続いた。
石版にはこう書かれていた。

12050620

どうやらこの道をどっちに進めばいいか書いてあるようだ。そして、この問題を一番早く解いたのは最初に石版に気づいた茜だった。
「わかった！！ 左に進めばいいのよ！」 茜は喜びながら言った。
光聖、琴梨、静香、服部もわかったようだ……ただ1人、深海京介がまだわからないようだ。

「んぐぐつ！」

深海がわからずに悩んでいたら、そこに茜がちよっかいをだして来た。

「あらあらっ？ もしかして何で左に進むのかわからないの？ まあ、それでよくこの高校にうかったねえ？」

これに深海は我慢できず

「この女おまああ！！ ぶっ飛ばしてやろうかああああ！！！！」

と怒ってしまった。見かねた光聖は止めに入り

「落ちて着け深海、何で左に進むのかは俺が説明してやるから落ちて着け。大原ももうやめろ」

「そうだよ、茜ちゃん。深海さんにあまりちよっかいを出しちゃ駄目だよ」

と琴梨まで言われてしまった茜は仕方なく

「……………うーい」

と言った。

そして、光聖は深海にクイズの答えを説明していた。

「いいか？この12050620はそれぞれアルファベットの順番

を示している。だから12はL、05はE、06はF、20はT、これを全部合わせるとLEFT。つまり左ということになる。どうだ、わかったか？」

「そうか！なるほどな！！ありがとな、光聖」

深海は光聖の説明で納得いったようだ。

光聖、琴梨、静香、服部、茜、深海は迷路のゴールを目指して進んでいった。

問題2

2月13日、台東区浅草のビジネスホテルにて刑事のオレはとんでもない事件に巻き込まれた。その事件とは、浅草でオレは酔いつぶれ最終電車にも乗り遅れ、あるビジネスホテルに泊まっていた。午前3時15分頃トイレに起き、浴場の戸が開いていることが気になり近づいたところ遺体を発見した。被害者は津川栄治31歳、ナイフで心臓を刺され即死であった。従業員の話に午前2時から朝の6時までこのホテルの出入りは従業員用の鍵がなくてはできないらしい、オレが発見した時はまだ死んでそんなにたっていない様子だった。従業員が犯人でないとすれば、今日の客が犯人であると考えたオレは、午前4時過ぎであっただろうか、その日即座に客全員を1階ロビーへと集まらせた、そこでオレは「今日深夜、ホテル内で男の遺体が発見された、発見したのはオレだ、これは殺人事件である。犯人は今日の客、つまりあなたたちの中にいるとおもわれる」とちよっとイバッテ言ってみた。客のほとんどが眠い中起こされ、まだ寝ぼけていたがこの話を聞くと完璧に目が覚めたようだった。そしてオレは一人一人、個室に呼び事情聴取をおこなった。全員同じ質問をした、「何時に寝ましたか？」と「最後にトイレにいったのは何時ですか？」と「この殺人事件をどう思いますか？」の三つをそれぞれ聞いた。

国分「12時頃寝ました」「寝るちょっと前にトイレに行きました」
「いいえ、解りません」

稲垣「2時頃まで覚えています、寝たのはその後です」「トイレ？
12時頃でしたかねー」「知りませんよ、知らない人を私が殺してなんの得になるんですか、私は犯人ではありません、それよりあなたが第一発見者ですよ？　なんかあなたが怪しい」

城島「しらん」「俺は何にもしてへんでー」「まったくはよ寝かせ、何考えとんのこんな時間に、知らんヤツ死んだからやて何も悲しくあらへん」(怒られた、、)

山田「11時頃です、疲れてましたので」「トイレは寝る前に行きました」「本当は従業員が犯人なんじゃないですか？　出入りできたのは従業員だけなんですよ、だいたいなんで浴場なんかで殺したんでしょうね？」

永瀬「1時頃です」「うーん、12時半ぐらいかなー」「どう思います？　人を殺すって？　どんな気分なんでしょう？　ナイフで一刺しねー、信じられないよ」

仲居「2時半頃です」「1時くらいかな」「僕は何もしてません、いっしょにいた蚊取に聞いてみてください」

蚊取「2時過ぎかな」「仲居がいつてその後です。何時ぐらいだったかなー、思い出せません」「人が人を殺すときのパターンは二つ、殺したいから殺す、殺したくなくても殺してしまう、、当たり前前ですよ？　でも今回はどちらなんでしょう」

さあ、犯人は誰でしょう。ちなみに犯人は2人います。
制限時間は5分間

光聖たちは推理力テスト問題3の地点についており、今、まさにその問題を解いているところである。この問題はどうかやら事情聴取から誰なのか推理する問題のようだ。光聖、琴梨、静香、服部、茜、深海の6人は国分、稲垣、城島、山田、永瀬、仲居、蚊取の6人の証言でどこが変なのか、探している。いち早くどこが変なのか、気づいたのはこの2人、光聖と琴梨だ。

「犯人が誰かわかったぞ」

「私も誰が犯人かわかりました」

その後すぐに服部もわかったようだ。しかし、琴梨が自分より先にわかったことに意外感を示していた。

「お嬢ちゃん、ワイより先にわかったんかいな!？」

するとこれに茜が反応した。

「琴梨が先にわかったことが意外？ 琴梨はねえ、いつもはトロイけどこういうことにはいろいろと鋭いのよ」

と自慢げに茜が言った。だが、琴梨はトロイと言われたことが心外だったようで、

「い、いつもトロイって……………ひ、ひどい」

と落ち込んでしまった。

この問題の制限時間は5分なので、さっさと解くことにした。

光聖「ああと、じゃあ犯人が誰なのか答えようか。この問題は何時に寝たとか、最後に何時にトイレにいったとかは関係ない。だから、この問題のキーとなるのはこの事件をどう思うかという質問の答えがキーになる」

ここで落ち込んでいた琴梨が立ち直ったのか、問題の解説に加わった。

琴梨「光聖君、ここからは私が話すよ。この質問で答えたところがおかしいかったのは山田さんと永瀬さん。この刑事さんは客全員の前で『今日深夜、ホテル内で男の遺体が発見された。発見したのはオレだ、これは殺人事件である。犯人は今日の客、つまりあなたたちの中にいるとおもわれる』と言いました。山田さんは『本当は従業員が犯人じゃないですか？ 出入りできたのは従業員だけなんですよ、だいたいなんで浴場なんかで殺したんでしょう？』と言っています。刑事さんは出入りできたのは従業員だけとは言っていないし、浴場で殺されたとは言っていない。そして、永瀬さんは『どう思います？ 人を殺すって？ どんな気分なんでしょう？ ナイフで一刺しねー、信じられないよ』と言っていました。刑事さんはナイフで一刺しなんて言っていない。つまり、山田さんと永瀬さんの2人が犯人です」

しばらくすると『正解！』となり行き止まりだった道が開いた。琴梨は自分の推理が不安だったのか、ホッと一息をつき、安堵の表情を浮かべた。

光聖たち6人は推理迷路を進んでいった。

問題3

ある男が殺された、、、殺された男はダイニングメッセージを残していた。

オクタ

容疑者リスト

温子・早苗・みゆき・ともえ・サヤカ・丈太郎・ふみ

Q 犯人は誰でしょう？
制限時間は3分

この問題は簡単だが、少しわかりにくい。

光聖たち6人の中でこの問題を推理したのは服部だ。

「この問題のダイニングメッセージ、オクタを一度ローマ字に変換するとokutaとなる。このokutaを逆さ読みするとatukoとなり、漢字にする。そうすると、温子になる。つまり、犯人は温子や！」

しばらくすると『正解』と音になり、扉が開いた。

「よし！ 次、行くでー！」

と服部が元気よく言って行き、光聖、琴梨、静香、茜、深海の5人もその後続いた。

問題4

レモンが4個

ぶどうが2個

いちごが4個

バナナが5個

みかんが5個

桃が2個

Q 連想できる果物は？

制限時間は6分

この問題はレモン、ぶどう、いちご、バナナ、みかんを何かに変換するようだ。この個数も何か関係するようだ。そして光聖、琴梨、静香、服部、茜、深海の中で答えたのは意外や意外、深海だ。

「この問題の果物をそれぞれ英語に変える。そして、果物の個数の分だけ、英語のスペルの順番に当てはめる。そうするとレモンは lemon となり、レモンは4個だから、o。ぶどうは grape で2個だから、r。という感じにしていくと orange……つまり！

答えはみかんだ！！」

しばらくすると『正解！』となり、扉が開いた。

「よっしゃ！！ 次行くぞ！！」

「バカが騒ぐな！」

「んだとっ！？ コラッ！！」

深海と茜の二人は喧嘩しながら、進んでいった。その後に光聖、琴梨、静香、服部の4人も続いて行った。

最終問題

ある一軒家で1人暮らしの男性が死んでいた。

死因は心臓発作で間違いなく、どうやら息子たちへの手紙を書いている途中で、息絶えてしまったようだ。手紙には次のようなことが書かれていた。

お前達にこれだけは申ししておかなければなるまい。

人の未来など、誰にも分かるはずがない。

その日の午後に何が起こるかさえ分からないのだから。

私が突然死ぬかもしれないし、息子達が大病を患うかもしれない。成功するには、川が上流から下流へ流れるが如き時の流れを

朝夕同じように読まねばならない。

そして何事も最初が肝心だということを忘れるな。

それにしても咳が一向に止まらない。

どうやら私が演じてきた人生の舞台に幕を下す時がきたようだ。

最後に私の財産の全てが入った金庫の暗証番号を記しとく。

それはこの

一番重要なところで終わっているように見えますが彼はすでに暗証番号を書き残しています。

Q1・手紙に隠された暗証番号は？

Q2・Q1の答えを導き出した理由

制限時間は15分

どうやらこの問題が最後の問題のようだ。最後の問題だけにそうとう難しいようだ。それは今までより制限時間が10分近く長くなっていることが示している。さすがの光聖も解らない様子をしていた。服部も悩んでいた。琴梨、静香、茜、深海も同じようだ。

「手紙に暗証番号が隠されている、ってことは手紙の文章の中に数字を意味するものがある、ってことだ。……………けど、駄目だ。

まったく解らない。服部、お前はどうか？」

と光聖は嘆きながら、服部に聞いた。

「あゝくそ！ 駄目や、ワイもまったくわからへん」

服部もまったく解らず。光聖たちは数字を意味するのは何か必死に考えていた。

そうこうしている内に5分経過していた。問題の解答時間は残り10分。服部は残り10分のせいか、なんだか焦っているように見える。光聖はあまり焦っていないように見えるが心は焦っているようだ。

光聖（……………考える……………考えるんだ、必ず答えはある）

制限時間が7分経過したところ、琴梨が何かに気づいたそぶりをして
いた。だが、本当に合っているか不安で言おうとはしていなかった。
光聖がそれに気づき、琴梨に聞いた。

「琴梨、何か気づいたのか？」

「あつ、いや、別に……………」

「琴梨、何か気づいたのなら言った方がいい。そうすればそれが何
かヒントになるかもしれない」

光聖にそう言われ、琴梨は気づいたことを言いはじめた。

「ええと、あのね、この文章に十二支があるな……………って思つて」
茜は首をかしげて言った。

「……………十二支？」

「あゝと、つね、十二支に申や未があるじゃない？　それがあんな
つて思つて……………やっぱり問題と関係ないよね」

すると光聖は琴梨が言ったことで何か解ったようだ。

「……………いや、まてよ？　……………そうか！　解ったぞー！」

「光聖君、解ったの？」

と静香が尋ねた。

「ああ、琴梨のおかげだ。まず、暗証番号だから数字を意味するも
のが文中にあると考える。そして数字を意味するのは十二支だ。十
二支はそれぞれ二時間ずつの時刻示す。たとえば、十二支の子。こ
れは12を意味する。だから文中にある十二支の申、未、来（未）、
午、子、成（戌）、咳（亥）、演（寅）、庫（申）を抜き出す。そ
して、その『最初』を『朝夕同じよう』に読むと、『申』4『
未』2『来（来）』2『午』12『子』12『成（戌）』
8『咳（亥）』10『演（寅）』4『庫（申）』4』となる。
あとはこれを『上流から下流』、つまり元のままだが、文中の上か
ら登場した順にならべる。そうすると422121281044と
いう12桁の数字になる。だから暗証番号は4221212810
44だ」

しばらく経つと『ピンポン、正解』という音がなり、そのあとに『これで推理問題は終了です。ゴール地点にある、ハタをとれば、推理力テストは終了です』と放送された。

光聖、琴梨、静香、服部、茜、深海の6人はホッとため息をついた。それから、しばらく沈黙が続き、最初に深海が口を開いた。

「いや、危なかったな。まあ、でもあとはもうゴール地点めざして行くだけだな」

「あんたはほとんど何もやってないでしょ」

と茜がつつこんだら、深海は開き直る様子で言った。

「まあな！」

光聖たち6人は推理力テストを終わらせるべく、迷路のゴール地点目指して走っていった。

推理力テスト、迷路のゴール地点は説明されたとおりA、B、C、Dのハタが第一高校の一年生の人数分、机に突き刺さっていた。光聖たち6人はハタのところまで行った。

光聖は言った。

「よし、じゃあ、みんなハタをとろうぜ。もちろんAをな」

琴梨「ええ」

静香「わかったわ」

服部「当たり前や！」

茜「そりゃ、そうよ」

深海「ああ」

光聖が掛け声をあげたと同時にみんなハタを取ろうとしたが、全員「せーのっ！」

のところで皆、手を止めた。なぜなら服部の様子がおかしかったからだ。そこに琴梨が駆け寄る。

「……………は、服部君？」

「へっ、へっ、……へつくしょん!!」

と服部はくしゃみをした。服部の近くに駆け寄っていた、琴梨はそれに驚き、こけると同時に何かを取った。それを見るとそれは……Dと書かれたハタだった!

琴梨は自分のハタを見て、気が動転したのか、

「ど、ど、ど、どうしょ」

とほとんど泣きそうな声で言った。

光聖は冷静な声で言った。

「まあ、おそらく取ったハタを変えることはできないだろうな。あの司会者こういう例は言ってなかったし。あきらめて、そのままにするしかないだろうな」

静香は信じられないという感じで言った。

「光聖君! あなたもつとちゃんとした言葉をかけられないの!？」

「そういわれてもな」

茜は何かを決心したのか、こんなことを提案した。

「ねえ、みんな琴梨がもうクラスを変えられないんなら、私たちが琴梨に合わせない? もちろん、服部君、あなたのせいで琴梨がこうなったんだから、あなたは強制よ」

服部はこれに返事をした。

「まあ、ワイのせいやからな、わかったで」

他の光聖、茜、深海も賛成のようだった。だが、琴梨は納得にいかない様子だった。

「だめだよ! みんな、私のためにDを選ばなくても……!!」

私がドジを踏んだからこうなったんだし」

そこに光聖がこんなことを言った。

「いや、琴梨。たぶん、君がいなかったら、最後の問題は解けなかったと思う。だから、俺はDにしようと思う。みんなも同じじゃないかな?」

そういわれるとみんなは、

静香「うん。私も光聖君と同じだよ!」

服部「当たり前や！ 仲間なんやし」

茜「琴梨のおかげでここまで来れたんだから、最後まで琴梨についてぐよ！」

深海「ああ、俺も同じだ！」

そういうと光聖、静香、服部、茜、深海はDのハタを取った。

「よし、じゃあゴールだ！」

そして、光聖たち6人の推理力テストは終わった。

第4話 推理力テスト『後編』（後書き）

次回は探偵科高校の入学式と光聖の秘密についてです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9377u/>

高校生探偵 鋼

2011年11月9日10時05分発行